

海ゴミ回収の現場から ——第二回粟島クリーンアップ作戦

本誌編集部

昨年に引き続き「粟島クリーンアップ作戦」が実施された。島内外の有志たちによつて処理された海岸の漂着ゴミは約三三トン。遊び感覚も盛り込まれた清掃活動は、ゆるやかな協働意識への萌芽ともなり、「粟島ファン」を増やすきっかけにもなった。国の責任を明確にした「海ゴミ処理法」が制定された今年、環境保全を軸にした海岸線への注目が高まりつつある。

島内外の三七〇人で 三三トンの漂着ゴミを回収

平成二二年六月二一日（日）、夜半からの叩きつけるような激しい雨も朝方には上がり、一転、ざらざらと太陽が照りつけ、汗が滝のように流れる好天のもと、「第二回粟島クリーンアップ作戦」の当日を迎えた。

一〇時二五分のほぼ定刻、定期船「あすか」が粟島漁港に到着すると、実行委員長をはじめとした関係者、住民の

みなさん、前泊した参加者が迎える中、多くの方々が続々と下船してくる。港では大漁旗が翻り、最大級の歓迎の意を表しているかのよう。

港に設けられた受付では、地元の小中学生が主力となり、ゴミ清掃の「三種の神器」であるゴム手袋、ビニール袋、ペットボトルの水を樂しげに配布している。そんな子どもたちの笑顔が嬉しい。

主催者、来賓の応援挨拶の後、移動。バスに分乗し向かった先は、小倉町海岸だ。



小倉町海岸で行われた漂着ごみの回収風景。

ここは、西海岸の強烈な波浪により大型ゴミが漂着しやすく、砂利浜であることから足場が悪く、また、石と石の間にゴミが入り込み、清掃がしにくい。さらに、海岸と道路の位置関係が悪く、入り江の奥に流れ着いたゴミは、三〇メートルほど人手で運ばねばならず、三重苦四重苦を抱える現場である。粟島浦村役場や住民の方々のみでは、この海岸を漂着物から守りきるのは、難しく苦しいと思われた。

流れ着いたゴミは、漁網、漁業用ロープ、浮き、木片、ペットボトル、プラスチックの容器、発泡スチロール、タイヤ、ホイールキャップなど。それが水も滴る瑞々しい状態にあるのだから、重さは増すばかり。

クリーンアップ作戦の第一段階は、役場や関係者の方がビニール袋に詰め、海岸の彼方にまとめて下さっていた数百袋もの山積みみの漂着物を、運搬用トラックの近くまで運ぶことだ。

参加者は、一列縦隊で隊列を組み、リーダーの指示で道路から入り江の奥まで列をつくり、待機。しばしの後、号令がかかり、いよいよ作戦開始だ。バケツリレーよろしくゴミリレーが始まる。

列の先頭から、漂着ゴミの入った袋が、これでもか、とばかりに送り込まれてくる。あまりの重さに一人では受けきれず、二列縦隊に編成替え。二人で受け、二人でゴミを

送る。これなら楽だ。

途端に、ゴミリレーの勢いがつき、列の先から、トスやアタックもどきでゴミ袋が近づいて来る。軽い袋、重い袋、送り手の姿勢で判別する。それを迎え撃ちながら、地元のみなさんと、ひとときの交流が始まる。

同じ苦勞をした人同士は、仲良くなるのが早いという法則がある。まったく同感だ（このほかにも、食事をした回数、酒を飲んだ回数という法則もある）。以前からの知り合いのように、みんなで話が弾んでいる。

東京デイズニールランドに遊びに行きたいという、元気いっぱいの女子中学生、ノリノリの年配のご婦人やお母さんたち。不思議なことに、女性陣の印象が強く残っている。

人手が足りずに、茂崎海岸地区から助っ人に来た女性陣が、「子どもたちは、こっちの方が楽しいんじゃないかしら」「呼んであげればよかった」と口にしてている。小倉町海岸の清掃は、じつに楽しかったようだ。

では、ゴミ掃除が楽しいわけを考えてみよう。こちらの砂浜では、漂着物の大物をあらかじめ解体し、ひと抱えくらいの大きさのビニール袋に入れて、まとめてあった。それを、大勢の人間が数珠つなぎでゴミリレーをし、運搬するトラックの停まっている道路の近くまで、せつせと順送りしていく。

このやり方がミソだったようで、マラソンランナーが、

脳内麻薬が出て走るのが快楽になるという「ランナーズハイ」と似たような状況だったのだろう。

清掃のみで考えると、面倒で辛くさい作業に容易に陥ってしまふ。そこをおしゃべりとゲーム性という楽しい味付けをすることで、和氣藹々とした、交流の場に転じさせることができた、というわけだ。

ゴミリレーで良い汗をかいた後は、海岸清掃である。石ころの間に挟まったゴミを参加者が競って拾うものだから、あつという間に大物は少なくなる。

そんなこんなで、予定の一時半が過ぎ、作戦終了。参加者一同、湧き水のごちそうを飲み、汗をぬぐったところで、バスで港近くへ戻り、役場二階の集會室に設けられた昼食会場に急ぐ。会場では、地元のみなさんで準備してくださった、にぎりめし、魚の煮付け、味噌汁が待っていた。クマザサに包まれた二つのにぎりめしが乗っている皿が、これまたよい。竹を割ったエコなお手製である。人数分を準備するのは大変だったろうなと、島の人の暖かい気持ちに嬉しくなる。

一同、思い思いの席に陣取り食事タイム。「魚が美味しい」「おむすびが旨い」「竹の皿がエコ」「味噌汁おかわりしたい」との声が、あちこちから聞こえてくる。心地よい労働の後の思いやり溢れる食事だ。おいしくないわけがない。時間がある方には、「漁り火温泉 おと姫」の入浴も無



粟島の港にて、大漁旗を掲げ、ての歓迎風景。



ゴミ清掃の必需品、ゴム手袋・ビニール袋・ペットボトルの水を配布。



作業開始にあたり、本保粟島浦村村長が挨拶。



地元が準備してくれた、クマザサに包まれたにぎりめし、魚の煮付け、味噌汁の昼食。



集められたゴミの一部をトラックに積み込む。

「粟島クリーンアップ作戦」とは

クリーンアップ作戦は、新潟県のお小さな離島・粟島での活動を通じ、海岸清掃の充実感を味わうとともに、離島における漂着ゴミの現状について考えてほしい、粟島の取り組みを広く発信したい、という思いから企画・実施され、今年で2回目を数える。茂崎海岸と小倉町海岸を対象とした今回の海岸清掃は「粟島クリーンアップ作戦実行委員会」の主催で実施された。近年、新潟県佐渡島、山形県飛鳥との「三島連携」に取り組んでいることから、佐渡島の方々はじめ、東北公益文科大学の具尚浩先生や長岡科学技術大学の山本麻希先生が率いる学生たちなど多くの島外者（粟島応援団）も参加しており、海岸清掃のみならず島の将来に期待が持てる。

主催：粟島クリーンアップ作戦実行委員会
共催：粟島浦村、NPO 法人野外教育学習センター・粟島伝習館、NPO 法人いわふね地域エコセンター

後援：村上地域振興局、朝日新聞新潟総局、読売新聞新潟総局、新潟日報社
協力：JEAN / クリーンアップ全国事務局、NPO 法人パートナーシップオフィス、東北公益文科大学、村上ロータリークラブ、粟島浦漁業協同組合、粟島汽船(株)、(株)福田組粟島作業所、(株)高建粟島作業所、三国コカ・コーラボトリング(株)、ハワイの水(株)高陽社

料サービス。ありがたいことだ。

冷房の効いた部屋でしばし休憩した後、本保村長のご厚意で島内一周の見学に。村長宅の愛犬りんちゃんに挨拶し、出発。オオミズナギドリのお薦めの見所、などを案内していただいているうち、帰りのフェリーの時間に遅れそうになり、慌てて戻り、乗船。

と、乗り場で、すでに今日の成果速報が一人ひとりに手渡されているではないか。その迅速さに感動。自分たちの作業の成果がその場で分かるということは、とても大切なことだ。本作戦の事務局

は、人を動かす要諦をよくご存知のようだ。

速報によれば、参加者は、住民、ボランティア、関係者などを合わせ三七〇名。県内各地はもとより県外からも多数参加したそうである。清掃活動の成果は、小倉町海岸ではフレコン（袋状の包材）は三九個、茂崎海岸では二八個、合計でトン数換算

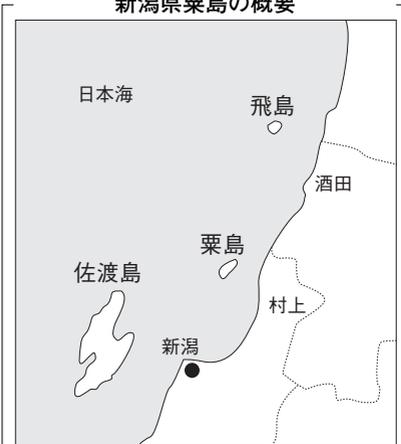
三三・五トンの大量の漂着ゴミを処理したことになる。

参加者からの声もいくつか紹介しよう。

「おいしい食事にいい運動ができてすばらしい一日だった」「きれいな海と大量のごみの対比が印象的だった」「このイベントをきっかけに粟島について知ることができた」「岩に挟まったロープ、網に苦戦した」「草むらのゴミが取りづらく苦労した」——などとおおむね好評だ。

いささかでも粟島のお役に立てた喜びを胸に、大漁旗に送られ、船は一路、村上へ。船上の一同は名残惜しげに、小さくなる島影、見送る人々の写真を撮っている。すでに

新潟県粟島の概要



新潟県村上市の岩船港から海上35kmの日本海にある、東西4.4km、南北6.1km、面積9.86km²、海岸延長23kmの島。1島で粟島浦村を形成。人口359人（平成21年9月1日現在）。わが国では、青ヶ島村、御蔵島村、利島村（いずれも東京都）に次いで4番目に人口が少ない自治体である。財政規模は、歳入が9億490万円、歳出8億3,616万円。経常収支比率は116.2%、減収補てん債（特例分）及び臨時財政対策債を除くと124.3%（いずれも平成19年度決算）。

島内からは縄文遺跡が発見され、帆船時代には北前船の風待ち・潮待ち港として年間1,000隻もの船が寄港し、賑わいを見た。明治22年粟島浦村となり、以後、昭和と平成の大合併を経てなお1島1村を維持している。

なお、岩船—粟島間を結ぶ粟島汽船は、村の全面バックアップを得て、今年6月1日から9月30日までの期間、いわゆる「高速道路1,000円」に対抗し、岩船港発のフェリー（片道2等）を1,000円（通常1,830円）、高速船（片道）を2,000円（通常3,690円）とする大幅割引を実施。10月以降も県の支援により継続予定だ。

もう千切れた紙テープが風になびく。この中から、きつとクリーンアップ作戦のリピーターや粟島のファンが生まれることだろう。

きつかけはなんでもよい。要は、自分たちの島を多くの人に知ってもらおうチャンネルを増やすことが大切だ。

地元から寄せられた アイディアの数々

ゴミの処理について、地元の皆さんから泉のごとく湧き出てきたアイディアを整理してみよう。

アイディア① ゴミリレーを、参加者を増やして二チームつくり、チーム対抗の競争形式で行う。仲良しになる仕掛けとして、住民と島外参加者の混合。ついでに、それぞれのチームのテーマ音楽も決めておいて、作戦実施地域への「入場行進」の際に流してみる、など。盛り上がることを請け合い。

アイディア② ゴミ拾いの際に、数人でチームを組み、チーム対抗で行う。これまた住民と島外の混合で。さらに、いくつかのテーマを設定し競う。たとえば、ビニール袋一袋でいちばん重いゴミを集める「重さ競争」。もつともかさばるゴミを集めてきた「嵩を競う競争」など。

アイディア③ 買い物競争の変形で、いくつかの札を用意し、その札で指定されたゴミを拾う競争。たとえばプラ

ごみ、流木、ペットボトルなど。はやくゴミ袋をいっぱいにした人が勝ち。

こうしたアイディアの根本は、「遊び」の要素を取り入れること。海岸でのゴミ拾いはたしかにしんどい。だってら「つらい作業」ではなく、不謹慎なようだが「楽しい遊び」にしてみよう、ということである。

参加者が、みな明るく、なにより自分たちが楽しむことは、とても大切。眉間に皺を寄せ、「やらねばならない」と重荷を背負うと、長続きしない。また、島外からの参加者を多く募集する仕掛けを考えることも重要。清掃だけでなく、島全体の応援団になってくれるかもしれない。

海岸清掃は、これからブームになる可能性がある。それは、最近「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な景観及び環境保全に係わる海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律」が成立したからだ。

全国各地の同じ関心、同じ志を持つ仲間協力を求め、ネットワークを広げよう。このような活動は、ストリートミュージシャンに似ている。最初は、だれも振り向かないでもきつと、いつかは誰かが立ち止まり、応援してくれる人が現れる。それまで我慢できる人が、地域を変えることができる。だからこそ、自分が楽しむという心を持つとう。

イベント性を持たせ、島での前泊・後泊をセットにして島を売り出せば、島を知ってもらえ、島にお金が落ち、人

の交流も生まれる。そんな可能性を感じさせる今回の粟島でのクリーンアップ作戦だった。

いくつかの島々で連携し、共通のパスポートをつくり、いくつかの離島で海岸清掃に参加すれば、どこかの島での宿泊費がただになるような仕掛けができないものか、と夢も膨らむ。

離島の漂着ゴミ処理推進の根拠となる

「海ゴミ処理法」

平成二十一年七月八日、午前一〇時から行われた参議院本会議において、一つの法案が全会一致で可決成立した。

「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な景観及び環境保全に係わる海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律」（平成二十一年七月一五日法律第八二号）だ。

この法律は、離島などにおける海岸漂着物対策を総合的かつ効果的に推進するために制定されたものであり、

① 海岸漂着物等の円滑な処理及び発生抑制を図るため、基本理念を定め、国、地方公共団体、事業者及び国民の責務を明らかにする

② 政府は、海岸漂着物対策のための基本方針を定め、都道府県は、必要があると認めるときは、基本方針に基づき、地域計画を作成する

③ 海岸管理者等は、その管理する海岸の清潔が保たれる

よう海岸漂着物等の処理のため必要な措置を講じなければならないものとし、市町村は、必要に応じ、海岸管理者等に協力しなければならない

④ 政府は、海岸漂着物対策を推進するための財政上の措置及び法制の整備を講ずる

などをその骨子とし、離島その他の地域で地方公共団体が行う処理経費についての特別配慮規程が設けられている。

この法律では、都道府県が、海岸漂着物対策推進協議会を組織する際に、住民および民間の団体を構成員とすることができる。知事は、海岸漂着物対策の推進を図るための活動を行う民間の団体を、海岸漂着物対策活動推進団体として指定することができる。

国および地方公共団体は、海岸漂着物などの処理に関する活動に取り組む民間の団体などが果たしている役割の重要性に留意し、これらの民間の団体などとの緊密な連携の確保とその活動に対する支援に努めるものとする、とされている。

従来、漂着ゴミに関しては、海岸管理者（都道府県など）、市町村、NPOやボランティアが、国や都道府県の支援などを受けてつつ対応してきたが、法的には処理についての明確な主体と責任が定められておらず、財政措置も不十分だった。また、漂着物という性格上、管轄区域外から漂流してくるゴミの処理を、自治体に負わせることが適当か、と

いう問題もあった。

この法律では、海岸漂着物に関し、海岸管理者すなわち国が責任を持つことが明記されたという点で、画期的である。財源の裏付けも、緊急経済対策の一環として、三年間で五〇億円を基金として積むこととされている。

情緒豊かな文言が使用されていることも特徴的だ。例えば、第三条「総合的な海岸の環境の保全及び再生」での、「……白砂青松の浜辺に代表される……」や、第五条「海岸漂着物等の発生の効果的な抑制」での、「……海岸漂着物如山から川、そして海へとつながる水の流れを通じて海岸に漂着するものであって、……」などだ。

加えて、離島に対する配慮も入れ込まれた。第二十九条「財政上の措置」の第二項で、「政府は、前項の財政上の措置を講ずるに当たっては、国外又は他の地方公共団体の区域から流出した大量の海岸漂着物の存する離島その他の地域において地方公共団体が行う海岸漂着物の処理に要する経費について、特別の配慮をするものとする。」とある。全国離島振興協議会長である高野佐渡市長をはじめとした関係者の熱意と運動が実ったものだ。

離島の海岸は、海岸漂着物に対するわが国の防波堤として、特に有効なフィルターであり、重点地域として清掃することで、わが国全体の海岸保全に貢献することができる。そこで、離島住民の果たす役割は大きいと考えられ、海岸漂着物の処理を通じ、人材育成のために新たな投資の枠組みを実現させたい。クリーンアップ事業実施にともなう処理運搬費、人件費への予算措置が見込まれ、発生抑制の実験的な取り組みを地域計画に盛り込むことも可能だ（例えばデポジット制度）。

法律の付帯決議には海底ゴミ、浮遊ゴミについても対策がとられることが明記され、漁業者の負担を大幅に減少させよう。事業者の責任も明記され、市町村とNGO、NPOなどの連携に加えた協働事業が可能である。

海岸線へのモニタリングは国土保全そのものであり、海岸漂着物の処理のみならず、環境保全を軸として河川流域をふまえた沿岸域の総合的管理を視野に入れ、新たな広域連携への道が拓ける。

この法律を、島々のみなさんとともに、育てていきたいと思う。

(七)